

弥生～古墳時代の北陸地方における木製農耕具の様相

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 石田, 浩司 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/2815

金大考古

第32号

修士論文概要

弥生～古墳時代の北陸地方における木製農耕具の様相

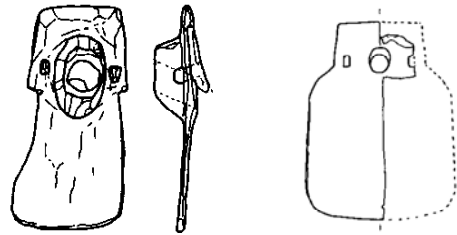
石田 浩司

1937年の唐古池の発掘調査で木製農耕具が出土して以来、木製農耕具の研究の中心は主に機能研究であった。それが、1980年代に入ると木製農耕具の様式論的研究、編年・伝播ルートの追求が関心の中心となった。北陸地方の木製農耕具研究もその流れを受け、機能的側面はほとんど触れず、専ら木製農耕具の様式論的研究、伝播論に終始していたきらいがある。しかし、農耕具は様々な農作業に用いるための道具であり、機能を無視して研究を進めるべきではない。そこで、筆者は北陸地方の資料を中心に、木製農耕具を機能的側面を重視して分類・整理した。その後で、近畿地方など他地域の木製農耕具と比較し、北陸地方における木製農耕具の特徴を明らかにした。

北陸地方には、直柄平鋤・直柄又鋤・直柄横鋤、曲柄平鋤・曲柄又鋤(ともにナスビ形)鋤が存在した。直柄平鋤は身の幅・柄孔角度をもとに、4つの種類に分類することが可能で、幅の狭い方からABCDと名付けた。最も幅の狭い直柄平鋤Aはその形態上、一般耕作に用いられたものではなく、雑草などを打ち払う「はらい鋤」としての機能を推定した。それ以外の直柄平鋤は、CとDには泥除が装着されるがBには装着されないことなどから、直柄平鋤の中でもBとCの間、つまり幅12cmを境に大きく機能を使い分けていたことが分かった。そして、直柄平鋤Bは、直柄又鋤・鋤とともに水田耕作の荒起こし作業に用いられたものと推定し、直柄平鋤C・Dは荒起こしの次に行う碎土用の鋤と推定した。曲柄鋤は縄文時代以来の土木具と考え、その延長で開墾具としても使われた可能性を指摘した。また、近畿地方では直柄平鋤Bに相当する狭鋤が弥生後期以降に消滅し、北陸地方でも柄孔周辺の厚さが薄くなり、強靱度が低くなることと、弥生後期以降に曲柄鋤が増加することを合わせて考え、本来は開墾・土木の機能を有していたが、後には荒起こしなどの一般耕起にも使われる

ようになったことを指摘した。

北陸地方の木製農耕具の大きな特徴は、泥除の数が多いということである。これは山陰地方と共通したことで、日本海側で共通した特徴といえる。また、田下駄がほとんどないというのも日本海側に共通した大きな特徴である。興味深いことに、太平洋側の近畿・東海地方は日本海側とは全く正反対で、田下駄は多いが泥除は少ない。このことが何を意味しているのかは分からないが、少なくとも、日本海側と太平洋側の気候の差、それによる農作物の違い・農作業の違いを示している可能性はあるだろう。



江上A遺跡の直柄平鋤と泥除

木製農耕具の伝播論については、これまで多くの研究者が論じてきたところであるが、筆者なりの考えもまじえて整理した。北陸地方では弥生中期より近畿地方や山陰地方の木製農耕具の影響を受けた。北陸地方には泥除式とc1類の泥除装着装置が多いということと、弥生中期後半に山陰地方からナスビ形曲柄鋤がもたらされたということから、近畿地方よりもむしろ山陰地方からの影響が強いと考えられる。弥生後期以降も近畿・山陰地方の影響は受けてはいたが、北陸独自のものも生み出された。1つは泥除式であり、もう1つは方形柄孔を持つナスビ形曲柄鋤である。これらが富山県東部で作り出され、弥生末期以降金沢平野を中心に北陸地方全体に伝わり、その後泥除式は滋賀県や山陰地方に、方形柄孔のナスビ形曲柄鋤は長野県を経て関東・東北地方へと伝わった。

木製農耕具を中心に、木製品の生産体制についても論じた。弥生中期は木製品が大量に出土することから、各集落内で木製品の生産

・供給体制が行われていた。弥生後期になると、集落単位ではなく、1地域単位で生産・供給体制が整った。例えば、金沢平野では、西念・南新保遺跡からは未製品が出土するが、それ以外の遺跡からは全く出土しないことから、専門の生産集団が存在したことがうかがえる。古墳中期になると、ナスビ形曲柄鍬が全国的に形・大きさがほぼ統一されてくる。これは、鉄製U字形刃先を装着することによる規格化がなされた結果だとも考えられるが、日本列島のほとんどの地域をカバーする広域の生産・供給体制がなされたと考えられる。金沢市の畝田・寺中遺跡から、規格化されたナスビ形曲柄鍬が多く出土したということから、北陸地方においてもそのような広域の生産・供給体制の中に入っていたことがうかがえる。